

Web 開催 2020.12/3-12/23

異常卵割胚は移植対象胚となり得るか

櫻井 裕子、林 祐希、宮本 有希、幸池 明希子、森本 義晴

医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

異常卵割により発生能が低下するという報告は多数あるが、異常卵割胚が良好胚盤胞に発生することもあり、未だ不明な点も多い。本研究では、卵割様式による臨床妊娠率を比較し、異常卵割胚が移植対象胚となり得るかを検討した。

【方法】

2016 年 1 月～2019 年 12 月の期間に、単一分割期胚移植または単一胚盤胞移植を行った 30～45 歳の患者 1292 周期を対象とした。観察は CCM-iBIS(ASTEC)で行い、正常卵割胚(A 群)と第一卵割異常胚(B 群)、第二卵割異常胚(C 群)の 3 群に分類した。30～39 歳と 40～45 歳において、各群の臨床妊娠率を分割期胚移植、胚盤胞移植、良好胚盤胞(Gardner 分類 3BB 以上)移植について比較検討した。

【結果】

分割期胚移植における臨床妊娠率は、A 群、B 群、C 群で 30～39 歳では 33.0%(97/294)、17.5%(11/63)、21.3%(10/47)となり B 群は A 群より有意に低かった($p < 0.05$)。40～45 歳では 16.3%(36/221)、3.1%(2/64)、6.1%(3/49)となり B 群と C 群は A 群より有意に低かった($p < 0.05$)。

胚盤胞移植において、30～39 歳では 48.2%(164/340)、32.7%(17/52)、39.1%(9/23)となり B 群は A 群より有意に低かった($p < 0.05$)。40～45 歳では 35.3%(41/116)、28.6%(4/14)、33.3%(3/9)となり差はなかった。

良好胚盤胞移植において、30～39 歳では 52.1%(147/282)、48.0%(12/25)、28.6%(4/14)、40～45 歳では 39.1%(36/92)、37.5%(3/8)、50.0%(2/4)となり各年齢で 3 群間に差はなかった。

【考察】

分割期胚移植では 30～39 歳と 40～45 歳のどちらも A 群で臨床妊娠率が有意に高かったこ

とから、卵割様式は移植胚選別の重要な指標となることが示唆された。一方で、胚盤胞移植では 30～39 歳において、A 群で B 群より臨床妊娠率が有意に高かったが、良好胚盤胞移植では 3 群間に差はなく、異常卵割胚であっても良好胚盤胞になれば妊娠率は低下せず、移植胚として有用であると示唆された。今後さらに症例数を増やし、妊娠経過についても検討していきたい。